

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



陽高県の古い町並み。民家に木材がつかわれている。かつては“木の文化”が存在したことがわかる

Contents

- 『雁棲塞北』に寄せて P 2
- 身近なところから環境のための第1歩 P 3
- 霊丘植物園の湧き水が増加 P 4

2005.3

102

『雁棲塞北』に寄せて

劉徳有

大同における緑化協力の記録『ぼくらの村にアンズが実った』（高見邦雄著、日本経済新聞社）の中国版『雁棲塞北—来自黄土高原的報告』が、李建華さんと王黎傑さんの翻訳で、中国国際文化出版社から出版されます。塞北は大同一帯の地名です。

以下の序文を劉徳有さん（中華人民共和国文化部元副部長、中国対外文化交流協会常務副会長、中華日本学会会長）が寄せられています。なお、北京で4月に中国職工対外交流中心などの主催による出版記念会が開催される予定です。

高見邦雄さんの『雁棲塞北—黄土高原からの報告』が中国でも世に問われることになったのは喜ばしいことである。

この本を一気に読み終わって、深い感慨を禁じ得なかった。これは人を感動させずにおかない真実の物語である。ここには高見さんとNGO「緑の地球ネットワーク」の日本の友人たちが、中国の塞北地方—黄土高原の緑化につくした13年にわたる無私の貢献が記録されており、彼らと当地の村人がお互いにまったく知らない段階からどのようにして理解しあい、密接に協力するようになったか、その過程が記録されている。中日関係が揺れ動く今日、このような民間交流は中日両国人民の相互理解を促進するためのたいへん貴重な経験である。と同時に、わが国が西部大開発の戦略を実行し、西部のインフラ建設と生態建設を進めようとするいま、本書が世に出ることはまことに時宜にかなった、注目すべきものである。

改革開放以来、中国経済は世界が目を見はる大発展を遂げた。日進月歩の変化は中国人民にまぎれもなく恩恵をもたらし、生活水準の改善はかつてな

いものである。しかし見落としてならないのは、経済の猛進によって危機的なまでに環境が破壊された地域があり、略奪的な資源開発が環境破壊と貧困の悪循環を招いていることである。高見さんが活動する大同の1人あたり水資源量は年間430m³にすぎず、国際人口行動の標準の1,700m³に遠く及ばないばかりか、「嚴重欠水」の500m³をも下回っており、その実態に驚愕せざるをえない。さらに恐ろしいことに、海河・瀾河の水系にあっては大同はまだ多いほうで、この水系の平均は343m³にすぎないのである。北京、天津の大都市、大経済圏がここにあることを考えれば、これはけっして大同だけの問題ではないことがわかる。

大同の陽高県には1つの民謡がある。「山は近くにあるけれど煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば九年は早（ひでり）で一年は大水……」。自然環境はきわめて劣悪で、砂嵐が頻発し、水土流失が深刻であり、その一端はこの本からも読みとれる。しかし高見さんと彼の友人たちは、環境が劣悪であるからこそ、ここで緑化事業を開始した。初期には資金不足に悩み、加えて地元

の人たちの無理解と戦争をめぐる感情の葛藤などによって、活動は大きな困難に陥った。しかしそれに挫けず、誠意と実際行動によって地元の幹部と大衆の理解と信頼をかちとり、日本の団体や個人の道義的、経済的、そして行動による支持をかちとり、さらに日本政府の関係部門の援助をも得るようになったのである。13年にわたる不断の努力を通じて、地元の村民との協力のもと、4,000haの黄色い大地に1,600万本が植えられたのである。まことにすばらしい業績であり、その功德ははかりしれない。その背後にはどれほどの人たちの心血と苦労があったことだろうか。彼らは植樹の重要性、科学的な栽培と技術改善をさぐるとともに、人材育成を重視し、さらには思想的に理解しあうために努力を積み上げてきた。彼らの業績は人びとの注目を集め、高見さんたちは中国政府の「友誼賞」、中華全国青年連合会の「母なる河を守る行動国際協力賞」、大同市政府の「環境緑化賞」、朝日新聞社の「明日への環境賞」などを受賞したが、それも当然のことといっている。

私がとてもうれしく思うのは、中国側の塞北の幹部と大衆が高見さんたちの行動を深く理解し、強く支持したことである。この過程には、人を感動させずにおかない純朴、無私、献身の事跡が無数にある。彼らの存在がなければ、高見さんたちの事業も今日の成果を上げることはできなかったであろう。

中日両国の関係にとって、ポイントとなる重要な時期に、NGO「緑の地球ネットワーク」が示した「大地に木を植え、人の心にも木を植える」という原則はきわめて重要である。「雁棲塞北」出版の意義は、塞北—黄土高原の緑化という本来の事業をも超えて、具体的な実践を通じて中日両国人民の相互理解を深めることに大きな啓示を与えるものである。

このような良書を私たちが手にする機会を作ってくれた翻訳者、李建華さんと王黎傑さんの努力に感謝し、私はわが国の広範な読者がこの本を通じて私と同様の驚きと啓発を得ることを心から希望する。

2005年1月

第11回会員総会のお知らせ

今年は会員総会のあとに記念講演をおこなうことにし、中国の急速な発展が生むひずみを主に上海周辺などでみてこられた京都精華大学の山田國廣さんに講師をおねがいします。

【緑の地球ネットワーク

第11回会員総会】

●日時：6月18日（土）13時30分～16時40分

○会員総会：13時30分～14時40分

○記念講演：15時00分～16時40分

山田國廣さん（京都精華大学教授）

●場所：大阪市立総合生涯学習センター第1研修室（大阪駅前第2ビル5階 各線「梅田」駅、JR「大阪」駅／東西線「北新地」駅）

★総会終了後、同じ会場で手づくり懇親会を予定しています。去年はたいへん好評でした。今回も企画・世話係を募集します。希望者はGEN事務局までご連絡ください。

身近なところから環境のための第1歩

ー世界で始まっている素敵なアイディア

幸田 シャーミン (ジャーナリスト)



昨年10月、環境ジャーナリストの幸田シャーミンさんが北京での会議に出席後、大同の緑化協力地を訪問されました。帰国後に北越地区でおこなわれた講演では、GENのこともふれておられます。ご本人の承諾をいただき、ここにその講演の一部を掲載します。

皆様こんにちは、幸田シャーミンです。

本日はお招きいただき、大変光栄に思っております。どうもありがとうございます。

私は、環境の世界に入ってから12年目になるのですが、これまで毎年、国内や海外の色々な地域に出かけていき、環境のさまざまな分野でプラスのアクションを起こしている方々にインタビューする活動を続けてきました。本日ここにお越しの皆様も素敵なプラスのアクションを様々な地域で広げられる方々だと思います。このような活動を通して、素敵な方々にお会いし、色々なことを教えていただきました。

つい数日前なのですが、中国から帰ってきてまして、北京で砂漠化問題に関する専門家の国連会議がありまして、そこに5日間ほど参加し、その後に大同という北京から西に320kmほど行った所に行きました。黄砂の通過点でもあるところなんです。富山にも黄砂が来ますよね。北京にも大同からの黄砂が来ていますし、北京にとっては大同は水がめでもありますし、電気の一部も大同から供給しております。大同の農家にお邪魔して、私はアジアで深刻な水不足を初めて見ました。本当に水が無いんですね。色々な援助で井戸を掘ってもらった所もあります。でもまだ多くの人々は水を遠くまで汲みに行かなければなりません。アフリカと違って中国の場合は男性が水を汲みに行ってくれるのです。水は相当重いですし、遠くへ水を汲みに行かなければいけませんから大変です。本当に乾燥した土地なんです。そこで日本の「緑の地球ネットワーク」というNPOグループがこれまで10年間で1,200万本もの苗木を植えたというすばらしい活動を行っています。本当にすごいなあと思いましたし、もっと応援したいと思いました。

私にとって砂漠化の現場を見るのは今回が初めてでした。砂漠化してしまった所ではなく、砂漠化しつつある所ですね。専門家会合でお会いしたチェコ共和国のテサロア博士という女性の方から非常に興味深い話を聞きました。この方は砂漠化の専門家で「土が私のライフワークです」という方なのですがこのような話をして下さいました。土をすくってティースプーンにのせると1杯には、だいたい5～6gの土が入るのだそうです。1gの土には10億の微生物が生息している。ですからティースプーン1杯の土には、50億～60億の微生物が含まれていることになります。これを人間に置き換えてみる

と、世界人口が60億ですから、スプーン一杯の土には地球の人口と同じぐらいの微生物が含まれていることになります。これは健康な土の場合です。土にはそれだけ豊かな生命が宿っているということなのですね。今、地球上の陸地の3分の1が乾燥地になってきていて、その面積がどんどん広がっています。地球は水の惑星と言いますが、土の惑星でもあるわけですね。英語で地球のことを、アース(earth)って言いますね。アース(earth)は、同時に「土」という意味もあります。昔の人々が地球のことを考えたときに「土」の果たす役割の大きさを考えたのでしょうか。私たちはもう一度私たちを生かしてくれている水、土、大気との関係を良いものにするようしっかりと取り組むことが求められています。

下水処理の大切さを認識 ～ 大阪市下水道館を見学して

会 田 伸 子 (GEN 事務局)

1月22日土曜日、下水道科学館の見学に参加しました。参加者は16名。入場が無料にも関わらず、大人も子どもも楽しめる充実した設備をもち、下水の仕組みがわかりやすく紹介されているのにおどろきました。

昨年末の新潟県中越地震では、私の実家の市でもいたるところで下水道が道路上に隆起し、下水機能がマヒしたため、一部地域では生活排水を減らすため長い間水の使用を制限され、簡易トイレの使用を余儀なくされました。電気、ガス、水道が使えても、下水道が使えないだけで生活様式を大きく変えなければならないことを知り、普段はほとんど意識をしない下水道が実は私たちの生活に密接に関わっていることを再認識しました。今回この経験をふまえて、あらためて下水道の仕組みを学ぶことができ、非常に有意義な時間となりました。

特に印象的だったのは、浄化後の水

はきれいに透きとおっていた反面、その処理後に大量の汚泥が残り、焼却処理されて埋立地に運ばれているということでした。全国各地の浄水場から毎日大量に発生する汚泥。ここにもごみ問題と同じ問題が存在していました。

私たちは毎日さまざまな洗剤やシャンプー等を使用しますが、見た目はきれいに浄化されてもそれが環境ホルモンとして水中に残留しないのかも気になりました。私たちが排出した水は浄化され河へもどり、また私たちの口にもどってくる。水循環の模型を見ながら、人間が関わることで水に化学物質をたえず添加し、見た目にはきれいに浄化しても目に見えないところで汚染濃度が高まっているのではないかと考えました。

今回下水道の仕組みをながめながら、さまざまな問題に思いをはせ、自分の生活スタイルを見直してみるよいきっかけとなりました。

霊丘植物園の湧き水が増加

2005年度から計測開始を計画

【柴刈りと放牧を禁止したら】

霊丘県上寨鎮で自然植物園の建設をはじめたのは1999年4月ですから、この春でまる6年です。翌年には管理棟が完成して、職員が常駐するようになり、柴刈りも放牧もストップしました。

それ以来、驚くべき変化が起きました。まず、草や灌木が大きく茂ってきたことです。昨年12月に現場をみると、枯れ草や落ち葉が地表を覆っています。これが分解して土壌をつくりませんが、低温と乾燥とでその過程はゆっくり。かなり分厚くたまっていますので、山火事がほんとに心配。いいことだけじゃないんですね。

海拔1,000mを超えるところではリュウウツナラ（遼東櫟）が伸びはじめました。最大のものは樹高9m、胸高直径15cm。小さいものは去年発芽したもので、そのあいだに連続的に分布しています。比較的まとまって生えているところで数えると、1m²あたり1本です。

シラカンバも育っています。本来ならナラより高所に生えるはずですが、いまあるのは900m前後のところ。樹高6～7mになり、昨年は種子を飛ばしたので、天然更新が期待できます。

【敷地全体で緑が濃くなる】

このように大きなものは、種から育ったものではなく、タキギに切られたものの株が残って、そこから萌芽したのでしょう。1か所から数本まとまって生えているものが多い。これくらいのナラやシラカンバは、1年に樹高70cm、直径1cmは伸びますから、5年もするとずっとりっぴになるでしょう。

それらの木が生えているのは主に北側の日陰斜面で、中国では「陰坡」と呼びます。乾燥がひどく日較差（1日の寒暖の差）の大きすぎる日向斜面「陽坡」は植物が育ちににくいのです。ところが最近、ここの緑が濃くなりました。トネリコの一種の灌木が茂ってきたのです。横に根を伸ばしてそこから芽をだすようで、1株で100本以上のものもあります。

全体として風景が変わってきて、小鳥や小動物の種類と数が増えました。それがまた植生の再生を速めるでしょう。ノウサギが増えて苗木をかじり、キジが苗畑を荒らすといった歓迎できない要素もありますが、それも植生が増えたから起きること。

【湧き水の量が増えてきた】

最近の目立った変化は湧き水が増えたことです。そもそも、ここを選んだのは敷地のなかに湧き水があったからです。直径5mほどの小さな池もあります。

敷地の面積は86haですが、ここが扇形をしており、扇の先端にあたるところは海拔1,300m強、要にあたるところが一番低くて海拔900m。湧き水も池も扇の要にあたるところにあります。

【乾燥地での森林の水収支】

話題を広げると、乾燥地の造林にとって水収支は大きな問題です。植生が増え森林ができると、降った雨はすぐには流れず、地中に蓄えられたあと、その一部が安定的に林の外に流れだします。雨の多い日本で森林に求められる機能はそれで、水源涵養と呼ばれます。

ところが蒸発量が降水量を上回るような乾燥地では、森林の量的な水収支が問題になります。森林ができると雨水の地中への浸透量は増えますが、樹木は地中の水を根で吸い上げ、葉から



植物園のリュウウツナラと李向東さん

蒸散させます。森林の蒸散量は裸地よりずっと大きいのです。森林はできたけれども、その下流で河が涸れた、地下水が涸れた、という現象が起こらないともかぎらない。

樹木が増え蒸散量が増加すれば、空中湿度が高まりやがて雨になる、森林ができれば雨も増えるという説があったけれども、最近の研究によるとそう簡単ではないようです。

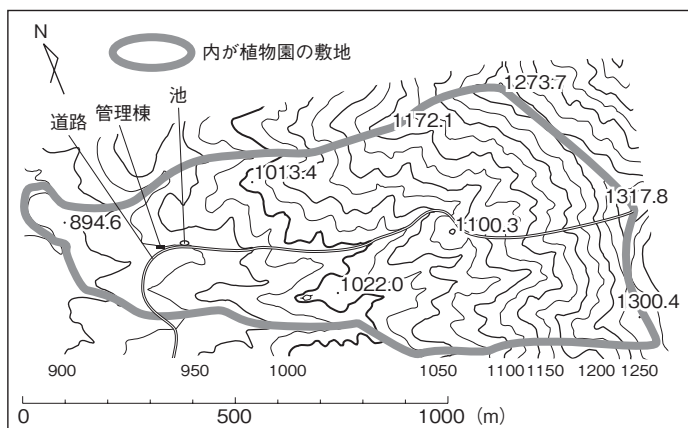
【現場でデータ収集を開始】

霊丘自然植物園で植生の再生とともに湧き水が増えたのは、理論的にもありうる話です。では、降雨時に地表を流れ、敷地の外に流れ出る水の量はどうか変化するのでしょうか。

ここの敷地はおおつらえ向きに扇形で、地表水の大部分も扇の要に集まって、それから流れ出ます。湧き水のほぼすべてもここに集まります。ここに小さな堰をつくって、そこから流れ出る水の量と、降水量とを連続的に計測し、そのデータを長期間蓄積すれば、植生の再生と水収支について貴重な資料がえられるでしょう。

このプロジェクトのスタート時、ここがハゲ山だったころ始めていれば、もっと劇的な変化を記録できたでしょうが、たいていは現実の変化をみてから思いつくということのようですね。

日本の専門家の協力をえて、2005年度から、その測定を開始したいと考えています。関心のある方のご協力をお願いいたします。（高見）



使用済みプリペイドカード回収終了

たくさんのご厚意に感謝～ひきつづきご協力を

使用済みテレカの回収をはじめたのは1995年。収集家向けマーケットの業者が買い取ってくれました。それ以後、テレカ以外のプリペイドカードも対象に加わり、気軽にできる活動としてたくさんの方々にご協力いただきました。現在までに換金したカード類の総枚数は約73万枚、金額はおよそ440万円。すべてをマツの苗木に使ったとして換金時の時価で計算すると、2,506,000本、760ha分に相当します。まさに「チリも積もれば山になる」、みなさんのご厚意に心から感謝しています。

携帯電話の普及でテレカの量は激減し、マーケットも縮小しています。売

渡し価格も大きく下がり、使用済みプリペイドカードの回収は終了することになりました。現在手元にお持ちのカードは、GEN事務所までお送りください。6月いっぱいまで完全に回収を終了します。

回収をつづける品目は下記のとおりです。今後ともご協力をお願いします。

- 古切手 ●書き損じハガキ
- 未使用の切手／ハガキ／商品券／テレカ
- 外国コイン
- ★小銭募金もつづけています！

チラシ兼ステッカーを同封しています。適当な箱に貼って回収箱にしてください。



黄土高原植林行

昨年春・夏とツアーに参加された後藤蘭子さんが短歌誌「関西アララギ」700号記念の30首競詠に『黄土高原植林行』で入賞されました。作品の一部をご紹介します。機会があれば、今後もしこづつ掲載します。

スコップに土掘る吾に村の子ら

杏苗運び水運びくる

黄土の丘に植えて三年の松を見ん

砂嵐に背を煽られてゆく

オンドルの上に今宵は眠らんか

ポプラの梢の夕星を見て

雲南だより〔4〕
貧困とダム

茂田井 円 (GEN 関東ブランチ)

雲南は大型水力発電建設に揺れています。前回取り上げた三江(怒江、金沙江、^{ランツァン}瀾滄江)の計画は、国策として強力に中央政府が後押ししているのかと思いきや、どうも内情は複雑な様子。北京の中央政府にもマイナス面を危惧する意見が強いようです。

怒江に関しては1990年代に国家の電力部門が立案したプランが2003年8月に国家発展改革委員会を通過。ところが昨年2月に國務院に提出された「怒江中下遊水電規画報告」に対して、國務院総理の温家宝が「慎重研究、科学決策」と指示。このため計画は國務院を通過せず、泡を食った企業側の1つ、中国華電集団雲南会社の総経理は「国家は、この計画を延期してはならない」とのコメントを出しました(雲南情報報12/31)。

外国のNGOなどもいる反対派は①世界自然遺産にも指定されている地域をも含む生態系の破壊、②大量の移民を生む、③地震多発地帯である、などを反対の理由に挙げています。一方、雲南省政府や地元関係者を中心とした

賛成派は「反対派は、現地の状況や具体的な数値をまったく理解していない」と憤慨やるかたなし。①については、怒江は、もはや本来の河の流れではなく保存価値は低く、生態環境に対する影響は少ない、②は、貧困地区数十万人の貧困問題の解決につながる、といえます。江沢民時代の経済開発政策でめぐってきたチャンス、理系出身の温家宝(北京地質学院卒、地質鉱産部門の技術員もしていた)らにつぶされる、との思いが雲南省側にはあるようです。

昨年2月には金沙江流域の省北東部にある永善県から南部の勐連県に第一陣900人が移住しました。新聞には、幸福そうに微笑むおじいちゃんと赤ちゃんの写真とともに「冬は故郷より寒くないから過ごしやすいわ」などの談話が掲載されています(同1/21)。小学校と現金もそれぞれの県にプレゼントされました(春城晩報1/14)。寄贈し

たのは事業主の中国三峡総公司。長江中流域に大規模ダムを建設している会社です。

瀾滄江上流域の農村を歩くと、自給自足のために生活に不自由はないものの、子供の就学の機会と、そのための現金不足に悩んでいる様子。1人の子の就学のために親兄弟が都会に労働に出かけて留守、という家もありました。一方、退耕還林のために昆明周辺に移民させられた村の話ですが、移民先に工場があったために農作物が煤煙で真っ白、住民の健康問題が起きていたところもあります。移民が必ずしもよいとは限らない。やはり貧困対策とダム建設は分けて考える必要があると感じます。



金沙江の観光地、虎跳峡の付近もダムの底に沈む予定とのこと

植物屋のこぼれ話 (続編) その2

立花 吉茂 (GEN 代表・花園大学客員教授)

●食べる植物

食べる植物といえば農作物であるが、これを「のうさくぶつ」と読む人がある。大学で議論したが「工作物」は「こうさくぶつ」だから同じじゃないかという先生がいた。だが「工作」という言

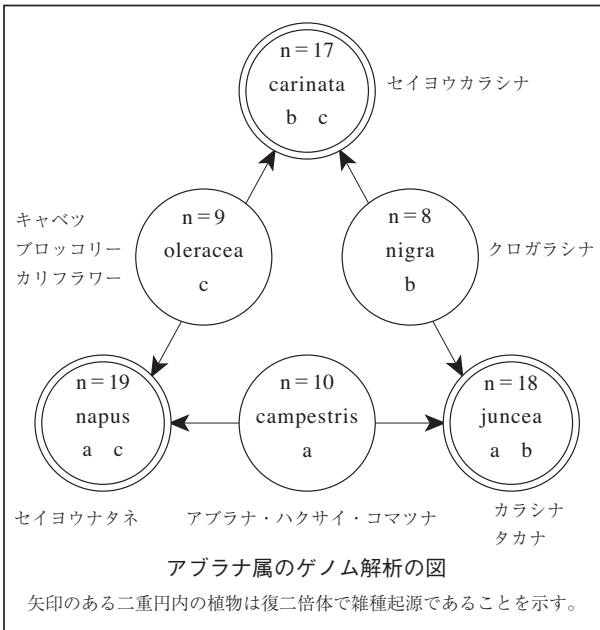
葉はあるが「農作」という言葉はないと私が反論した。これは、「農業上の作物」であり省略されて「のうさくもつ」なのである。「工芸作物」は「こうげいさくぶつ」ではなく、「繊維作物」は「せんいさくぶつ」ではない。収穫されたら「農産物」「のうさんぶつ」となるが、これは「産物」「さんぶつ」という言葉があるからではないのだろうか。

理屈はこれくらいにして、本題に入りましょう。われわれが食べる動物は肉、脂、乳、卵などを食べるが、細かく見ると肉用種、乳用種、卵用種などに分かれ（兼用種もあるが）ているが、植物はどうだろう。米、麦などは種子を食べ、果物は果実を、また野菜では果実のみならず、葉、茎、根、

などを利用する。根を食べる野菜はゴボウ、サツマイモなど、茎を食べるのはコールラビ、ステムレタスなどのほか、地下茎ではレンコン、ジャガイモなどがあり、葉ではキャベツ、ハクサイなど多数あり、果実ではナス、キュウリなどがある。だが、キュウリやナスの葉や茎は食べない。一方ハクサイやキャベツの果実や種子は食べない。1種類の植物でどの部分を食べているか、調べているうちに面白い植物を発見した。それはキャベツである。Brassica oleracea という学名のある1種類の植物であるが、本当の根以外はすべて利用しているからおもしろい。

根 -
葉 キャベツ メキャベツ ハボタン
茎 コールラビ
花 ブロッコリー カリフラワー
種子 油糧種

アブラナ属の植物は栽培の歴史も古く、よく改良されたのかもしれない。その証拠に百年近くも昔に、そのゲノム解析がおこなわれている。そのころには一万倍も見える電子顕微鏡ではなく、普通の単眼の顕微鏡しかなかったのであるから驚きである。



GEN 自然と親しめ会

初夏の馬ヶ背国有林を楽しむ

昨年11月の間伐作業が好評だった馬ヶ背国有林で、また「自然と緑」のスタッフに指導いただき、簡単な作業と山遊びを計画しています。初夏の山林で爽快な汗を流しましょう。

- 日時：5月29日(日)10時～15時頃まで
- 場所：滋賀県比良山麓の馬ヶ瀬国有林
- 集合：午前10時 JR湖西線「北小松」駅前
- 参加費：700円(保険料を含む)
- 持ち物：作業のできる服装、弁当、飲み物、手袋、雨具、タオル
- 定員：20名
- 申込み：5月24日までにGEN事務所へ
- 協力：NPO自然と緑

あの人 この人



皆さん、はじめまして。私は川角隆二と申します。今年入会したばかりです。

私がGENに入会したきっかけは、GENがテレビで紹介されていたのと、インターネットで何となく検索したことでした。こんな人たちが中国のためにがんばっているんだな、と思ったことから興味がわきました。

それまで、小学生の時から漠然と地球環境への危機感がありました。

21世紀は中国の時代と呼ばれていますが。経済の発展は目覚ましいものがあ

りますが、それに伴って自然環境は破壊されています。私は中国が経済発展と自然環境にあふれた国になれば、と思っています。

2月16日には京都議定書が発効されました。砂漠化は地球温暖化への第一歩です。私は少しでも植樹をしてCO₂削減に貢献できれば、と思っています。CO₂削減技術というのは企業でないとできませんが、植樹も1つの技術と考えれば誰でもできると思います。

私は植樹の技術は全くありませんが、これから皆さんからのご指導をいただければ、と思います。今後ともよろしくお願いいたします。

* * * * *

投稿募集!

GEN会員の紹介コーナー「あの人この人」の原稿を募集します。自己紹介、GENとの関わり、アピールしたいことなどを600字程度にまとめ、顔写真(似顔絵か内容に関する写真でもOK)を

黄土高原史話〈24〉

バカとアホウの語源は何か

谷口 義介（摂南大学教授）

数年前ご一緒したワーキング・ツアーの不良中年組に、「バカで酒鬼（大酒飲み）」の尊称を奉らん。バリバリの第一線に在りながら、黄土高原に入れ込んで、連夜の汾酒（フェンジュウ）、愚にもつかぬこと（？）で、カンカンガクガク（侃侃諤諤）。ほとんど西日本の出身者だったので、バカではなくアホウとすべきでしょうが。

「バカ」は、サンスクリット語の moha 慕何より出づ。ただ、一説に馬鹿と書いて、秦の趙高が鹿を二世皇帝に献じて馬といった故事に本づく。もちろんバカは趙高ではなく、二世の方。

「アホウ」は阿呆とも書くが（芥川龍之介『或阿呆の一生』）、阿房とも（内田百閒『阿房列車』シリーズ）。秦の始皇帝は、渭水北岸の咸陽宮では手狭になったと、南岸の上林苑に宏大・壮麗な阿房宮を築いたが、数年で国が亡び、未完成のまま宮殿も炎上、だからアホウなことをした、と阿房宮起源説を信じていました。アホなはなし。

この阿房宮、『史記』始皇本紀に記述あり。東西 500 歩（690 メートル）×南北 50 丈（115 メートル）の巨大な建物で、堂上には 1 万人以上坐らせることができた、と。現在でも、東西 1270 メートル×南北 426 メートル、高さ数メートルの基壇が残る。この上に建てられていたのでしょうか。丸瓦・平瓦・空心磚（レンガ）なども出土。項羽によって焼かれたと伝えられますが、いま復元、もちろん中国各地に見られる

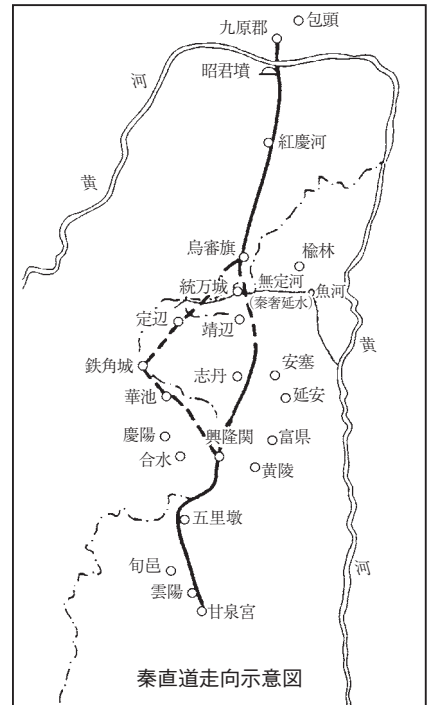
観光用です。

さらに始皇本紀には、「北山の石を切り出し、蜀・荆の材を運ぶなど、いろいろの資材」を集めて建造した、と。このうち「蜀・荆の材」に注目したい。蜀は四川省、荆は楚で湖北省、そこからはるばる建築用材を運んだということです。

そもそも秦が本拠とした関中は、決して森林の乏しい所ではありません。戦国末、秦に遊説した荀子、ときの宰相から印象を問われて、「山林川谷は美にして、天材の利多し」、つまり山林は豊か、と答えています（『荀子』彊国篇）。少し西になりますが、「隴西（甘肅省）は山に林木多し」、と『漢書』地理志にあります。

それなのに、遠くから材木を運んできたのは、建築用材としては南方産が適していたからか、それとも近場の樹木が少なくなり、膨大な需要をまかなえなくなったからか。1986 年、西安から西へ 350 キロほど行った甘肅省天水市放馬灘の一号秦墓から、木材の搬出ルートを描いた 4 枚の木板地図が出土。松や柏（コノテガシワ）・薊柏などの森林に至る行路が描かれています。戦国以来、秦がこの地区で森林を管理、材木を切り出していたことは明らか。

始皇帝による木材消費量は、おそらく空前絶後、半端なものではありません。秦王に即位してから 37 年間、自分の陵墓を造り続けますが、死に至るまで完成せず。20 世紀最大の考古学的



発見の一つ、兵馬俑坑、8000 体にのぼる陶兵・陶馬を焼くだけでも、燃料としてかなりの薪を必要としたでしょう。そのうえ晩年には、阿房宮のほか大土木工事が集中しました。

忘れてならないのが、直道。対匈奴作戦のための軍用道路です。南は咸陽近くの雲陽（陝西淳化）から、北は内モンゴル包頭（パオトウ）近くの九原まで。山を削り谷を埋め、稜線を選び平原を直進。黄土高原とオルドスの景観を一変させました。1988 年、その途中の榆林県城北にて、延長 70 キロ、幅 160 メートルの直道遺構を検出、と。全コースこの幅とも思えませんが、周囲の生態系にかなりの影響を与えたのでは。

そして、GEN 事務所まで郵便か e メールでお送りください。そのほか、本や団体、活動の紹介など、また、会報への感想やご意見もお待ちしております。

関東ブランチ blog スタート！

関東ブランチが blog を開設しました（<http://shinshu.fm/MHz/77.14/>）。イベントのお知らせなどがあるほか、話題に参加することもできます。1 度、アクセスしてみてください。

夏の黄土高原ワーキングツアー予告

夏のワーキングツアーの予定をお知らせします。費用などまだ確定ではありませんが、日程に大きな変更はないので、「今年の夏は…」とお考えの方はスケジュールをあけておいてください。

- 日程：7 月 30 日（土）～ 8 月 6 日（土）
- 費用：一般 = 175,000 円、学生 = 165,000 円（国際航空運賃、中国国内での交通費／食費／宿泊費、GEN 年

会費をふくむ。旅券取得費用、空港使用料、航空保険料、自由行動時の費用はふくまない）※中国国際航空使用 ※関西国際空港発着 ※成田発着便利用ご希望の方は、航空運賃の差額を別途お支払いいただきます。

- 定員：30 人（先着順）
- 申込締切：6 月 20 日（定員に達し次第締め切ります）

情報ひろば
いっしょなかたち

六甲奨学基金のための
第8回古本市

ご家庭にたまった古本を、兵庫県下で学ぶアジアからの留学生・就学生のための奨学基金に役立てませんか。

- 受付期間：3月1日～31日（必着）
- 送付方法：直接持参または送料送り主負担で送付

【注意】

- ・読む人の立場になって、汚れ・破れのひどいものはご遠慮ください。
- ・辞書大歓迎。絵本、マンガ、洋書可。
- ・雑誌、教科書、参考書、コンピュータ解説書、百科事典などは不可。
- ・お送りいただいた本はお返しできません。価格設定はおまかせください。

【古本市ボランティア募集】

陳列・整理のボランティア。交通費片道500円まで支給。可能な日にち・時間を下記まで郵便、fax、メールで。

●送り先・問合せ先
(財)神戸学生青年センター古本市係
〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1
tel. 078-851-2760 fax. 078-821-5878
e-mail : info@ksyc.jp URL http://www.ksyc.jp

★六甲奨学基金のための第8回古本市
●3月15日～5月15日まで毎日開催

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

第1回 地下水利用セミナー

水道事業での地下水調査・探査例を中心に、地下水の持続的な活用・水循環を考えます。

- 日時：3月29日（火）10時～16時30分
- 場所：大阪市立いきいきエイジングセンター 第2、第3研修室（TEL. 06-6311-3255 大阪市北区菅原町10-25 地下鉄「南森町」駅／「北浜」駅）
- 参加費：4,000円（別途昼食費800円、懇親会費4,000円）
- 主催・申込先：NPO法人 地下水利用技術センター（〒533-0023 大阪市東淀川区東淡路1-5-3-905 TEL. 06-6324-0090 FAX. 06-6324-2096 e-mail : tonokai@triton.ocn.ne.jp）
- 申込締切：3月22日

第1回 日中問題・国際NGO活動勉強会
中国の農民争議をどうとらえるか
内蒙古自治区と湖北省での調査報告より

マスコミでも報じられる中国の農民暴動。中国社会の急速な変化は、農村にどう影響しているのでしょうか。

- 日時：4月9日（土）13時30分～16時
- 場所：大阪市梅田東学習ルームD会議室（TEL. 06-6359-5832 大阪市北区

茶屋町1-40 阪急「梅田」駅茶屋町口）

- 講師：阿古智子さん（姫路獨協大学助教授）
- 参加費：1,000円
- 主催・申込先：関西日中交流懇談会（〒665-0881 宝塚市山本東1-16-6 TEL&FAX 0797-88-2240 e-mail : kansainc@hotmail.com）

映画『蟻の兵隊』
取材・製作進行中！

第二次世界大戦終結後、国民党軍に引き渡され、4年も国共内戦を戦わされた日本軍部隊があった。「自分たちはなぜ残留させられたのか」と真相を追いつめる元日本兵に『延安の娘』の池谷薫監督が取材、映画化に挑んでいます。

この自主製作映画を、あなたも応援しませんか。寄付は1口1万円ですが、1口未満でもOKです。

郵便振替 00150-5-759735
加入者名 「アリの兵隊」製作委員会
【『蟻の兵隊』製作委員会】
(有) 蓮ユニバース 〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷2-44-10-504 TEL. 03-5478-6077 FAX. 03-5478-6078
e-mail : gon-ren@wa2.so-net.ne.jp
URL http://www.arinoheitai.com